## Eu 添加 Sr<sub>4</sub>Al<sub>14</sub>O<sub>25</sub> 蛍光体の単一相合成

Single phase synthesis of Eu doped Sr<sub>4</sub>Al<sub>14</sub>O<sub>25</sub> phosphors

静岡大大学院<sup>1</sup>,静岡大電子研<sup>2</sup> ○(M2)羽田 京右<sup>1</sup>,(M1)大川 雅人<sup>1</sup>,小南 裕子<sup>1</sup>, 中西 洋一郎<sup>2</sup>,原 和彦<sup>2</sup>

Grad. School of Integrated S&T, Shizuoka Univ. <sup>1</sup>, Res. Inst. of Electron., Shizuoka Univ. <sup>2</sup>,

<sup>o</sup>Keisuke Hada<sup>1</sup>, Masato Ohkawa<sup>1</sup>, Hiroko Kominami<sup>1</sup>, Yoichiro Nakanishi<sup>2</sup>, Kazuhiko Hara<sup>2</sup>

E-mail: dhkomin@ipc.shizuoka.ac.jp

【はじめに】 現在、主に用いられている Sr-Al-O:Eu,Dy の蛍光体は、自然光や蛍光灯の光源で励起され長残光特性を示す。近年、避難時や災害時の応用への拡大から、より長寿命かつ耐久性に優れた蛍光体が求められている。その中で、 $Sr_4Al_14O_25:Eu,Dy$  は従来の長残光蛍光体よりも、発光特性・安定性の高さから、非常に有望視されている。これまで、 $Sr_4Al_14O_25$  相の形成には、ホウ素系化合物を Flux として添加することが有効とされていたが、環境負荷の問題点から、ホウ素利用量の低減化が求められている。本研究では、脱ホウ素による  $Sr_4Al_14O_25$  蛍光体の単一相合成のための Flux 添加による相形成及び発光特性について検討を行った。

【実験及び結果】固相合成法により、 $Sr_4Al_14O_2s$ :Eu 蛍光体を作製した。原料として、 $SrCO_3$ 、 $\alpha$ - $Al_2O_3$ 、 $Eu_2O_3$ を用いた。原料は化学量論組成となるように秤量し、乳鉢で十分に混合した後、1350 ℃で焼成を行った後、活性炭雰囲気中で還元処理を行った。また、目的の化合物である  $Sr_4Al_14O_2s$ 相の形成には、Flux が必要であり、 $NH_4Cl$ 、LiF、 $B_2O_3$ 等を添加した。得られた蛍光体の評価には、X線回折、紫外線励起発光、及び示差熱分析等により行った。Fig.1 に  $NH_4Cl$  を添加した試料の XRD 結果を示す。 $NH_4Cl$  添加量が  $10 \sim 100$  mol%のとき、 $Sr_4Al_14O_2s$  相の形成が確認された。しかし、Flux として  $B_2O_3$  を添加した試料のような、 $Sr_4Al_14O_2s$  相の単一相は得られなかった。また、20 mol%の時、 $SrAl_2O_4$  のピークが消滅し、 $Sr_4Al_14O_2s$  相が優先的であることが確認された。Fig.2 に励起波長 365 nm における  $Sr_4Al_14O_2s$ :Eu の PL スペクトルの  $NH_4Cl$  添加量依存性について示す。添加量が 20 mol%で 490 nm 付近の青緑色発光が得られ、その他の添加量では発光波長が長波長側にシフトした。これは、目的の  $Sr_4Al_14O_2s$  よりも  $SrAl_2O_4$  が優先的に生成したためである。現在、Flux と相形成との関係について検討を行っており、詳細については当日報告する。

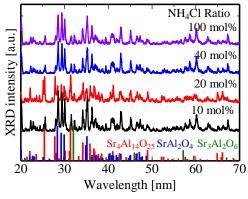


Fig.1 XRD patterns of Sr<sub>4</sub>Al<sub>14</sub>O<sub>25</sub>:Eu phosphors changed NH<sub>4</sub>Cl ratio.

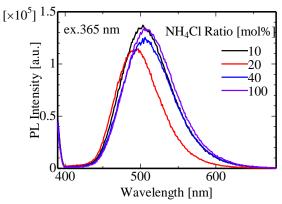


Fig.2 PL spectra of Sr<sub>4</sub>Al<sub>14</sub>O<sub>25</sub>:Eu phosphors changed NH<sub>4</sub>Cl ratio. (ex.365 nm)